

張籍詩訳注 (11)

——「讌客詞」「永嘉行」——

畑村 学
橘 英範

The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote (11)

Manabu HATAMURA
Hidenori TACHIBANA

要旨 本稿は、中唐の詩人・張籍の詩の訳注(11)である。本篇には、21「讌客詞」・22「永嘉行」(ともに中華書局『張籍詩集』卷一)の訳注を掲載する。

訳注

21 讌客詞

【題解】

客をもてなすうた。詩題を『唐詩百名家全集』では「宴客詞」に作る。「讌」は「宴」に同じ。

「讌(宴)客」は、唐代以前の詩には用例がなく、文章では後漢の蔡邕「司空房楨碑銘」(『藝文類聚』卷四七)に、「門無立車、堂無宴客」(門に立車無く、堂に宴客無し)とあり、史書であるが、『後漢書』独行伝(李充)に、「婦從充置酒讌客」(婦(李)充に従いて置酒して客に讌す)という用例もある。前者は「宴客」二字の名詞であり、後者は「客に讌す」と「讌」を動詞として用いている。

唐詩にも用例がほとんどなく、李頎「絶纓歌」(『全唐詩』一三三三)に、「楚

王宴客章華臺、章華美人善歌舞」(楚王 客を章華臺に宴し、章華の美人歌舞を善くす)とあるのは、「宴」を動詞として用いた例である。

杜甫には「讌客」「宴客」いずれも用例がない。

張籍にこの他一例、²³⁰「送鄭尚書赴広州」に、「白鷗飛達迎官舫、紅槿開当讌客亭」(白鷗は飛び達して官舫を迎え、紅槿は開き当たりて客亭に讌す)とあるのも「讌」を動詞として用いた例である。

徐注では「這是一首反映掌握現實追求快樂的人生觀的詩、也反映了人們社會矛盾中的苦痛、有了苦痛才要在苦中作業」と、社会矛盾のなかの人々の苦しみを反映した詩とするが、そうした深刻な内容ではなく、9句の表現等か

二〇〇四年十二月二十四日(受理)

畑村 学
橘 英範

宇部工業高等専門学校一般科助教
岡山大学文学部言語文科学科助教

ら張籍自身が宴会に招かれてその席で作った詩と解釈するのが妥当ではなからうか。

なお、この詩を李建崑注では新樂府辞とするが、郭茂倩『樂府詩集』には採録されていない。

【本文・書き下し文】

- 1 上客不用顧金羈 上客 金羈を顧みるを用いざれ
- 2 主人有酒君莫違 主人 酒有り 君 違ふこと莫かれ
- 3 請君看取園中花 君に請う 園中の花を看取せよ
- 4 地上漸多枝上稀 地上漸く多くして 枝上稀なり
- 5 山頭樹影不見石 山頭の樹影 石を見ず
- 6 溪水無風映更碧 溪水 風無く 映じて更に碧なり
- 7 人人齊醉起舞時 人人 齊しく酔い 起ちて舞う時
- 8 誰覺翻衣與倒幘 誰か覺えん 衣を翻すと幘を倒すとを
- 9 明朝花盡人已去 明朝 花尽きて 人已に去り
- 10 此地獨來空繞樹 此地 独り来りて 空しく樹を繞らん

【口語訳】

- 1 賓客よ 駿馬を振り返られるな
- 2 主人には酒がある 君 帰らないでください
- 3 君よ 園内の花をしかと見なされ
- 4 地面には落花がだんだん増え 枝には花がまばらだ
- 5 葉を茂らす山頂の木々のために 岩の姿は見えず
- 6 谷川に風も無く 葉の色が映じて碧さを益々濃くしている (もう初夏だ)
- 7 みんながこぞ酔って酔い 起ち上がって踊っている時に
- 8 服をひらめかせ 頭巾を逆さに被っているのに誰が気づこうか
- 9 明朝 花も消え 人々が立ち去ってしまった後
- 10 ここに独り来て 樹々の間をただ歩いて回るしかないのですぞ

【押韻】

羈—上平五支 違・稀——上平八微 (古詩通押)
 石・碧—入声二二昔 幘—入声二一麦 (同用)
 去—去声九御 樹—去声一〇遇 (古詩通押)

【語釈】

1・2 上客不用顧金羈、主人有酒君莫違

「上客」上級の客人。主賓。古くから経書や史書に見える言葉で、『礼記』曲礼上に、「食至起、上客起」(食至れば起つ、上客には起つ)とあるのは最も古い例の一つ。上客は、上客であるが故に宴席になくはならない存在であり、よってこの詩のように帰ろうとするのを引き留められる。詩の中では宴会の様子を詠じるなかに「上客を留む」という表現が慣用句として多く用いられる。張率「対酒」(『玉臺新詠』卷六)に、「何以留上客、為寄掌中人」(何を以てか上客を留めん、為に寄せん 掌中の人に)とあり、また謝朓「永明樂十首」其七(『樂府詩集』卷七五)に、「清歌留上客、妙舞送將歸」(清歌 上客を留め、妙舞 將に帰らんとするを送る)とある。

「上客」は唐詩でも常見の語。陳注は王維「河南嚴尹弟見宿弊廬訪別人賦十韻」(趙本卷二二)に、「上客能論道、吾生學養蒙」(上客は能く道を論じ、吾が生 蒙を養うを学ぶ)とあるのを引いている。この場合、「上客」は王維を訪ねた嚴尹(嚴武)を指す。

杜甫には五例あり、そのうち「奉漢中王手札」(『詳注』卷一五)に、「主人留上客、避暑得名園」(主人 上客を留め、暑を避けて名園を得たり)とあるのは、張籍の2句に見える「主人」と一緒に用いられている例である。張籍にもう一例、31「賈客樂」に、「金多衆中為上客、夜夜算縉眠獨遲」(金多ければ 衆中上客と為し、夜夜 縉を算えて 眠ること独り遅し)とある。一緒の船に乗り合わせた商人の中でもっとも稼ぎのいい者を「上客」と呼ぶと言う。「金」と一緒に用いられているのはこの詩と同じ。

「不用顧金羈」帰ろうとして馬を振り返られるな。「用」はここでは補助動詞として用いられ、軽い禁止、忠告の意を表している。

「金羈」は黄金で飾った馬のおもが。良馬を象徴すると同時に、騎乗する者(上客)の身分の高さも表しているであろう。「羈」は絡頭、馬のたてがみから顔にわたってつけるひも飾り。陳注や李冬生注が引く曹植「白馬篇」(『文選』卷二七)に、「白馬飾金羈、連翩西北馳」(白馬に金羈を飾り、連翩として西北に馳す)とあり、遊侠の騎る馬の立派さを表現するなかに見える。

唐詩の用例も多く、李冬生注引く李白「春怨」(王琦注本卷二五)に、「白馬金羈遼海東、羅帷綉被臥春風」(白馬 金羈 遼海の東、羅帷 綉被 春

風に臥す」とあるのは、先の曹植の詩を踏まえた表現であり、出征兵士の騎る馬の様子を詠う。

「主人有酒」「主人」は宴会の主催者。古くから用例のある言葉。漢代の作とされる古歌(『藝文類聚』卷七四)に、「主人前進酒、琴瑟為清商」(主人前みて酒を進め、琴瑟もて清商を為す)とあるのは宴会の様子を詠じた詩であり、このことと同じく酒とともに用いられている。また、王粲「公讌詩」(『文選』卷二〇)に、「願我賢主人、与天享巍巍」(願わくは我が賢主人、天と与に巍巍を享けんことを)とあるのは、宴席の主催者を指していることで張籍の詩と同じである。王粲の場合、「主人」は曹操を指す。

唐詩の用例も多いが、このことの表現の類似で言えば、李白「悲歌行」(王琦注本卷七)に、「主人有酒且莫斟、聽我一曲悲来吟」(主人 酒有るも且く斟む莫かれ、我が一曲の悲来吟を聴け)とあり、「主人有酒く莫」の句法が張籍と同じである。

杜甫にも多くの用例があり、「上客」と一緒に用いられた例が「秦漢中王手札」(前掲)に見えた。

張籍にはこの他六例、宴席の主人を指す用例としては、4「三原李氏園宴集」に、「借問主人翁、北州佐戎軒」(借問す 主人の翁、北州 戎軒を佐く)と見えた。その「語釈」も参照。

「有酒」は何気ない表現であるが、陳注は『毛詩』小雅「魚麗」や「南有嘉魚」「瓠葉」に「君子有酒」(君子 酒有り)とあるのを用例として引く。いずれも宴席の様子を詠じている。また、陶淵明「飲酒二十首」其三(四部叢刊本卷三)にも、「有酒不肯飲、但願世間名」(酒有れども肯えて飲まず、但だ願みるは世間の名のみ)とあり、俗世の評判を気にして酒を口にしない人々を批判するなかに見える。

「君莫違」君よ、心を変えて去つていこうとなされるな。「君」は第1句の「上客」を指している。

「違」は心が離れる。陳注は『毛詩』邶風「谷風」に、「德音莫違、及爾同死」(德音 違う莫し、爾と死を同じくせん)とあるのを引き、もと夫婦の誓い(偕老同穴)を述べるなかに見える。ただし、陳注が衛風とするのは誤り。李建崑注は、『説文』に「違、離也」とあるのを引く。

三字の並びでも用例がある。梁の簡文帝「紫驪馬」(『玉臺新詠』卷七)に、「離胡幸可薦、故心君莫違」(離胡 幸に薦むべし、故心に 君 違うこと莫かれ)とあり、女性(妻)が夫に、これまで通りの心を変えないで願う内容である。唐代では、李白「白紵辞三首」其三(王琦注本卷四)に、「高

堂月落燭已微、玉釵挂纓君莫違」(高堂月落ちて 燭已に微かなり、玉釵纓に挂く 君違うことを莫かれ)とあり、先と同じく女性が男性に対して言ったことばで、男性が逃げないようかんざしを冠のひもにひっかけると詠っている。いずれも「谷風」を踏まえ、女性が好きな男性を引き留めようとする内容である。

以上冒頭の二句では、帰ろうとする上客に対して酒がまだまだあることを理由に引き留めようとする。本来女性の男性に対する呼びかけである。「君違うこと莫かれ」を用いて、帰って欲しくない強い気持ちを表すとともに、やや諧謔的な雰囲気も出しているであろう。

3・4 請君看取園中花、地上漸多枝上稀

「請君看取園中花」どうか、園内に咲いている花を見て下され。

「請君」は願望を表す。二字の並びでは、唐代以前の文学作品にはほとんど用例がない。陳の祖孫「登詠水詩」(『藝文類聚』卷八)に、「請君看皎潔、知有淡然心」(請う君 皎潔を看よ、淡然の心有るを知らん)とあるのはそうした少ない例の一つで、「看」とともに用いられているこの詩と共通する。唐詩には多くの用例がある。張籍より少し前の人である李泌「長歌行」(『全唐詩』卷一〇九)に、「請君看取百年事、業就扁舟泛五湖」(請う君 百年の事を看取し、業就りて 扁舟もて五湖に泛かばん)とあるのは四字の並びが張籍と同じである。

杜甫には用例がない。張籍にこの他二例、26「北邙行」に、「人居朝市未解愁、請君暫向北邙游」(人 朝市に居りて 未だ愁いを解かず、請う君 暫く北邙に向いて游ばんことを)とあり、29「白頭吟」に、「請君漆上琴、彈我白頭吟」(請う君 漆上の琴もて、我に白頭吟を弾け)とあり、いずれもこの詩と同じ楽府詩で用いられている。

「看取」はしつかりと見る。「取」は補語として用いられている。二字の熟語としては詩を含めた唐代以前の文学作品に用例が見当たらない。

唐詩には用例が多く見える。孟浩然「題大禹寺義公禪房」(『全唐詩』卷一六〇)に、「看取蓮花淨、応知不染心」(蓮花の淨きを看取すれば、応に染まらざる心を知るべし)とあるのは、張籍と同じく見る対象は花(蓮花)である。

杜甫には一例、「酬韋韶州見寄」(『詳注』卷二二)に、「雖無南過雁、看取北來魚」(南過の雁無しと雖も、北來の魚を看取せよ)とある。

「請君看取」の四字の並びについては先に挙げた李泌「長歌行」を参照。ここでは「看取」する対象は「百年事」であった。

同時代の孟郊「古怨」(『孟郊詩集校注』卷一)にも、「看取芙蓉花、今年為誰死」(看取す 芙蓉の花、今年 誰が為に死せん)と花を「看取」する例がある。

張籍にこの他二例、先にも挙げた²³⁰「送鄭尚書赴広州」に、「此処莫言多瘴癘、天辺看取老人星」(此の処 瘴癘多しと言ふ莫かれ、天辺に老人星を看取せよ)とあり、⁴³⁶「送遠曲」に、「願君看取吳門山、帶雪經春依旧緑」(願くは君 吳門山を看取せよ、雪を帯び春を経ても旧緑に依る)とある。後者は「願君看取」と、四字の並びでもこのこと類似する。

「園中」は古くから詩等で用いられる言葉。張籍にもう一例、4「三原李氏園宴集」に、「園中有草堂、池引涇水泉」(園中に 草堂有り、池には引く涇水の泉)とあった。詩題にある通り、李氏の庭園を指しており、また宴席に招かれての作であることでの詩と共通する。用例についてはその「語釈」を参照。また、そこで挙げた用例以外に、劉楨「公讌詩」(『文選』卷二〇)に、「月出照園中、珍木鬱蒼蒼」(月出でて園中を照らし、珍木 鬱として蒼蒼たり)とあるのは、このこと同じく宴会の模様を詠じた詩の中で用いられた例である。

なお、「園中花」の三字の並びでは、隋の薛道衡「豫章行」(『文苑英華』卷二〇一)に、「鴛鴦水上萍初合、鳴鶴園中花併新」(鴛鴦 水上に萍初めて合し、鳴鶴 園中に花併びに新し)とある。

杜甫には用例がない。

「地上漸多枝上稀」晩春、花がほとんど散ってしまつて、枝に残っていないこと。「地上」「枝上」ともに唐代以前の詩でよく使われる言葉。

両者を対比して用いている例として、孟郊「杏塲九首」其二(『校注』卷一〇)に、「地上空拾星、枝上不見花」(地上 空しく星を拾い、枝上 花を見ず)とあり、また白居易「惜落花贈崔二十四」(九一八)に、「晚來悵望君知否、枝上稀疎地上多」(晚來悵望 君 知りや否や、枝上は稀疎にして地上は多し)とあり、いずれも張籍の表現と非常によく似る。特に白居易の詩は「多」「稀」の字も用いられている。

以上この二句では、晩春の景を詠い、帰ろうとする上客に園中の花が散つてしまふ前に大いに楽しもうと述べる。

ここまでの四句が一韻で、上客に対して「君」と直接呼びかけ、何とか帰るのを思いとどまらせようとしている。

5・6 山頭樹影不見石、溪水無風映更碧

「山頭樹影不見石」山頂の樹木のため、地面に岩が姿を隠している。山は、園内に設けられた築山のようなものを指しているであろうか。

「山頭」は古くから詩に常見の語。例えば鮑照「代陽春登荆山行」(『集注』卷四)に、「且登荆山頭、崎嶇道難遊」(且に登る 荆山の頭、崎嶇として道は遊び難し)とある。

唐詩の用例も多く、杜甫にも四例、そのうち山頂の意味で用いられている例として、「太平寺泉眼」(『詳注』卷七)に、「山頭到山下、鑿井不尽土」(山頭より山下に到るまで、井を鑿つに土を尽くさず)とある。泉のおかげで山の上から下まで土を深く掘る必要がないことを言う。

張籍にはこの他四例、例えば¹⁶⁵「送友生遊峽中」には、「峽裏聞猿叫、山頭見月時」(峽裏 猿の叫ぶを聞き、山頭 月を見る時)とある。

「樹影」は、唐代以前の用例は少ないが、うち梁の蕭子顯「侍宴餞陸倕令詩」(『藝文類聚』卷二九)に、「雨罷葉增緑、日斜樹影長」(雨罷みて 葉は緑を増し、日斜めにして 樹影長し)とあるのは、宴会の様子を詠じた詩のなかで用いられている例。また、陳の江總「侍宴玄武觀詩」(『文苑英華』卷一六九)に、「鳥声雲裏出、樹影浪中搖」(鳥声は雲裏に出で、樹影は浪中に揺る)とあるのも宴会の詩であり、かつ水面に映った樹木の影を詠じている点で、張籍の詩と類似する(ただし、江總の詩は『藝文類聚』卷六三は「樹彩」に作る)。

唐詩には初唐の頃から多くの用例が見える。初唐の上官昭容「遊長寧公主流杯池二十五首」其一四(『全唐詩』卷五)に、「水中看樹影、風裏聽松声」(水中に 樹影を看、風裏に 松声を聴く)とあるのは張籍と同じく水中に詠じた樹木を詠じている。

杜甫に一例、「送韓十四江東觀省」(『詳注』卷一〇)に、「黄牛峽靜灘声轉、白馬江寒樹影稀」(黄牛峽静かにして 灘声転じ、白馬江寒くして 樹影稀なり)とある。

張籍にもう一例、¹³⁰「早春閑遊」に、「樹影新猶薄、池光晚尚寒」(樹影新たにして猶お薄く、池光 晩にして尚お寒し)とあるのは、早春のため樹木の緑がまだ濃くなっていないことを詠っている。

なお、『唐詩百名家全集』は「緑樹」に作る。

「溪水無風映更碧」谷川に風がなく、そのために樹木の影が水面に映り、水の碧色がさらに色を濃くしている様子を詠う。

「溪水」は谷川。園中に設けられた人工の川をこのように表現しているのであろうか。古くから史書等に見られるが、詩には用例が見られない。唐詩には初唐の頃から多くの用例があり、宋之問「答田徵君」(『全唐詩』卷五一)

に、「家臨清溪水、溪水繞盤石」(家は臨む 清溪の水、溪水 盤石を繞る)とあるのはその一例。

杜甫にも二例、うち「溪漲」(『詳注』卷一一)に、「当時浣花橋、溪水纒尺餘」(当時 浣花橋、溪水 纒かに尺餘)とあるのは、浣花溪を指して言う。

張籍にこの他一例、³¹⁴「送客遊蜀」に、「杜家曾向此中住、為到浣花溪水頭」(杜家 曾て此の中に向いて住む、為に浣花溪水の頭に到れ)とあるのは、杜甫の浣花溪を指している。

「映更碧」「映」は「映」に同じ。照り輝く、色が鮮やかに見えるの意味。ここでは樹木の緑が水面に映っている様子を言う。水や樹木を「碧」と表現する例、及び樹木が水面に映ることを「映」と表現する例は古くから見える。

唐詩では、劉長卿「奉陪蕭使君入鮑達洞尋靈山寺」(『全唐詩』卷一四九)に、「山居秋更鮮、秋江相映碧」(山居 秋更に鮮かに、秋江 相映じて碧なり)とあり、秋の江に山の緑が映じて碧色をしていると、張籍のこの詩と同じような情景が詠われている。

「更碧」は用例がほとんど無いなか、杜甫に二例見える。「白水崔少府十九翁高齋三十韻」(『詳注』卷四)に、「坐久風頗怒、晚來山更碧」(坐久しくして 風頗る怒り、晚來 山更に碧なり)とあり、「遣興五首」其一(『詳注』卷七)に、「長林何蕭蕭、秋草萋更碧」(長林 何ぞ蕭蕭たる、秋草 萋として更に碧なり)とある。前者は夕方になって山の碧色がいっそう色濃くなっていることを言い、後者は秋の草が茂るさまを言う。

なお、『全唐詩』四庫全書本・静嘉堂本・『唐詩品彙』は「応更碧」(応じて更に碧し)に作る。また、全唐詩注に「一作映天碧、応一作晚」といい、更に別のテキストがあったことを記す。

この二句、3・4句が宴席から比較的近い風景を詠っていたのに対し、宴席からやや離れた周囲の様子を描写し、すでに季節が初夏に入っていることを詠う。

7・8 人人齊醉起舞時、誰覺翻衣与倒幘

「人人」人々。唐代以前では史書等には用例があるが、詩では管見では次に挙げる陶淵明の一例のみ。「飲酒二十首」其三(四部叢刊本卷三)に、「道喪向千載、人人惜其情」(道喪びて千載に 向とし、人人 其の情を惜しむ)とある。

唐詩には多くの用例があるが、王梵志の詩などに頻出することから、やや口語的な語彙と言えようか。

杜甫にも二例、うち「発白馬潭」(『詳注』卷二二)に、「人人傷白首、処処接金杯」(人人 白首を傷み、処処 金杯に接す)とあるのは、旅先で出会った人々を言う。

張籍の用例はこれのみ。

「齊醉」みながそろって酒に酔う。六朝唐代を通じて、詩ではこの用例のみである。

「起舞」立ち上がって舞う。宴会の描写によく見え、曹植「妾薄命行」(『玉臺新詠』卷九)に、「促樽合坐行觴、主人起舞娑盤」(樽を促して合坐觴を行る、主人起ちて舞い娑盤たり)とあるのは、宴会の列席者の前で主人が舞を舞う様子を言う。張籍の詩と同じく「主人」の語も見える。

唐詩の用例も多く、李白「過汪氏別業二首」其二(王琦注本卷二三)に、「酒酣欲起舞、四座歌相催」(酒酣にして起ちて舞わんと欲し、四座 歌いて相催す)とあり、宴会の盛り上がり最高潮に達した時に舞うという。張籍のこの詩もそうしたニュアンスがあるだろう。なお、李白には「起舞」の用例が多いが、対照的に杜甫には用例が一例もない。

張籍にこの他一例、37「楚宮行」(「巴姫起舞向君王、回身垂手結明璫」(巴姫起ちて舞い 君王に向かう、身を回し手を垂れて 明璫を結ぶ)とあり、美人の舞う様子を言う。

「翻衣与倒幘」衣をはためかせたり、頭巾を逆さにしたりして踊る。諸注が言うように、宴席の人々が酔った様子を表現する。

「幘」はかぶり物の一種。唐代以前の詩に詠われた例は数少なく、応璩「新詩」(『太平御覽』卷三六四)に、「醉酒巾幘落、秃頂赤如狐」(酒に酔って巾幘落ち、秃頂 赤くして狐の如し)とあるのは、酒に酔ってずきんが落ちるとあり、この詩と似た発想である。沈約「三月三日率爾成篇」(『文選』卷三〇)には、「緑幘文照耀、紫燕光陸離」(緑幘 文 照耀し、紫燕 光 陸離たり)とあり、上巳の宴の華やかさを、緑のずきんを被った貴人と駿馬である「紫燕」に騎った人物を取り上げて詠じている。

唐詩では、李白「宣城九日、聞崔四侍御与宇文太守遊敬亭、余時登響山、不同此賞、醉後寄崔侍御二首」其一(王琦注本卷一四)に、「日暮岸幘帰、伝呼隘阡陌」(日暮れて 幘を岸けて帰り、伝え呼んで 阡陌隘し)とあり、詩題の崔四侍御(崔宗之)が、重陽の節句、酒に酔って頭巾が傾き額が出ることを詠っている。杜甫にも、「北隣」(『詳注』卷九)に、「青錢買野竹、白幘岸江皋」(青錢 野竹を買い、白幘 江皋に岸く)とあり、北隣りに住む

人の酒に酔った様子を詠じるなかに見える。

なお、直接の典故というわけではないが、この句からは晋の謝尚や山簡の故事が想起され、張籍の意識にもあるいはあつたのではなからうか。

謝尚の故事は以下の通り。王導の掾となつた謝尚に、王導は、無礼講の宴席にて謝尚が得意とする「鳩舞」(舞樂の名。鳩は鳥名)を披露するよう言ったところ、謝尚は「衣・幘」を着て舞い、王導は参列者に手拍子させたという記事が『晋書』謝尚伝に見える(王)導以其有勝会、謂曰、「聞君能作鳩舞、一坐傾想、寧有此理不」。尚曰、「佳」。便著衣幘而舞。導令坐者撫掌擊節、尚俯仰在中、傍若無人、其率詣如此。」「衣・幘」の語は用いられていないが、同様の記事は『世説新語』任誕篇にも見え、劉孝標注所引裴啓『語林』にも、謝尚が酒に酔つた後、宴席の余興で鳩舞を舞つたことが記されている(謝鎮西酒後、於槃案間、為洛市肆上鳩舞、甚佳)。張籍の「衣を翻す」も、酔つ払つた状態で衣をひらひらさせて踊る様子を表現しているものと考えられる。

「倒幘」に関しては、有名な山簡の故事が想起される。荊州刺史であつた山簡は、酔いつぶれて駿馬に乗り、その際逆さに白い頭巾を被つて帰つた。『世説新語』任誕篇に見え、山簡の態度を人々が歌つた歌の文句に、「復能乘駿馬、倒著白接籬」(復た能く駿馬に乗り、倒に白接籬を著く)とある。先に「幘」の「語釈」で引いた杜甫の「北隣」にも、続く二句に「愛酒晋山簡、能詩何水曹」(酒を愛す 晋の山簡、詩を能くす 何水曹)と、酒飲みを隣人を山簡に準えた表現がある。

張籍は、実際の宴席の様子とともに、こうした飲酒に関わる故事をイメージしつつこの句を詠つたものと考えられる。

「翻衣」「倒幘」は、唐代以前の詩には用例が見当たらない。「翻衣」に関して、唐詩ではここ以外に二例見え、いずれも張籍より後の例である。姚合「和裴令公遊南莊憶白二十章七二賓客」(『全唐詩』卷五〇一)に、「鬪雀翻衣袂、驚魚觸釣竿」(鬪雀 衣袂を翻し、驚魚 釣竿に触る)とあるのは、じゃれ合う雀の羽を衣の袖(袂)に準えている例。杜牧「洛中監察病飯滿送韋楚老拾遺歸朝」(『全唐詩』卷五二二)に、「洛橋風暖細翻衣、春引仙官去玉墀」(洛橋 風暖かにして細く衣を翻し、春 仙官を引き去り 玉墀に去る)とあり、風が衣をひらひらと揺らす意味で用いている。いずれも酔つた様子を言う張籍の用例とは異なる。

「倒幘」は唐詩でも張籍のこの一例のみ。

以上この二句では、酒に酔つた客人たちの様子を詠じ、宴席のにぎやかさ、楽しさを詠うことで上客を留めようとする。

9・10 明朝花尽人已去、此地独来空繞樹

〔明朝花尽人已去〕翌朝になれば、花も散りつくし、宴会の参加者もみな去っていく。

「明朝」は、詩では鮑照「擬行路難十九首」其五(『鮑參軍集注』卷四)に、「君不見城上日、今暝没尽去、明朝復更出」(君見ずや 城上の日の、今暝に没し尽きて去るも、明朝に復た更に出づるを)と見える他、多くの用例がある。

唐詩では、初唐のことから用例があり、宋之間「端州別袁侍郎」(『全唐詩』卷五二)に、「明朝共分手、之子愛千金」(明朝 共に手を分かち、之の子千金を愛す)と、友との別れの詩でこの語が使われている。

杜甫には七例見え、そのうち翌朝の意味で用いられている例に、「酬孟雲卿」(『詳注』卷六)に、「明朝牽世務、揮淚各西東」(明朝 世務に牽かれ、涙を揮いて各々の西東す)とある。

張籍にこの他三例、うち224「贈商州王使君」に、「明朝從此辭君去、獨出商關路漸長」(明朝 此より君に辭して去り、獨り商關を出でて路漸く長し)とあるのは、別離の場面で用いられた例である。

「花尽」は普通に使われる言葉のようだが、唐代以前の詩文及び唐詩に用例がほとんどない。梁の元帝「望春詩」(『初學記』卷三)に、「葉濃知柳密、花尽覺梅疏」(葉濃くして 柳の密なるを知り、花尽きて 梅の疏なるを覺ゆ)とあり、初唐の劉希夷「江南曲八首」其七(『全唐詩』卷一九)に、「朝遊暮起金花尽、漸覺羅裳珠露濃」(朝に遊び暮れに起きて 金花尽き、漸く覺ゆ 羅裳に珠露の濃きを)とある。

杜甫には用例がない。張籍もこの一例のみ。同時代の劉禹錫「蹋歌行四首」其四(『箋証』卷二六)に、「自從雪裏唱新曲、直到三春花尽時」(雪裏より新曲を唱い、直ちに三春の花尽くる時に到る)と見える。

なお、この「人」について、徐注は「上客」を指すとするが、ここでは宴席に参加していた客人たちを指すと解釈するのが妥当であろう。

〔此地独来空繞樹〕宴会の終わった後、花の散つた木々を独り見てまわる。

「繞樹」については、陳注は魏武帝「短歌行」(『文選』卷二七)に、「繞樹三匝、何枝可依」(樹を繞ること 三たび匝り、何の枝にか依るべき)とあるのを引いている。この場合、鶻が高い木の周りを回ることを言う。六朝詩及び唐詩でこの語が使われる場合、多く魏武帝曹操の詩を踏まえ、鶻をはじめ鳥が木の周りを巡る意味で用いられるようだ。

張籍にこの他二例、うち325「和裴僕射看櫻桃花」に、「天明不待人同看、

遶樹重重履跡多」(天明 人の同に看るを待たず、樹を遶ること重重 履跡多し)とあり、花を見るために何度も木の周りを巡ると詠われている。

この二句、宴の翌朝の寂しさを詠い、上客に帰るのをやめるよう再度念を押して結ぶ。

【補】

この詩の構成は、換韻の箇所を目印にして次のようになる。

1〜4句 上客への呼びかけ

5〜8句 宴席の様子(景色・人々)

9・10句 翌朝の様子

1から8句までで宴席の周囲の風景や人々の様子を詠うことで、帰ろうとする上客を引き留めようとし、最後の9・10句で翌朝の宴の後の寂しさを詠うことで、帰ることを思いとどまらせようとしている。最後の二句で、突然翌朝の様子を詠じているところに張籍らしさが出ているといえよう。(畑村)

22 永嘉行

【題解】

「永嘉」は晋の懷帝の時の年号(307〜313)。「樂府詩集」卷九三、新樂府辞四、樂府雜題四に「永嘉行」の条があるが、張籍のこの詩を載せるのみであり、『全唐詩』にも「永嘉行」と題するのはこの詩のみのものである。

『樂府詩集』の解題には、次のようにいう。

『晋書』曰「懷帝永嘉五年六月、劉曜・王弥陥洛陽、入于南宮、昇太極前殿。縱兵大掠、悉取宮人珍宝。曜於是害諸王公及百官已下三万余人、遷帝於平陽。劉聰以帝為會稽公。」按劉元海本匈奴冒頓之後、曜其族子也。

『晋書』に曰く「懷帝の永嘉五年(311)六月、劉曜(前趙の第五代皇帝。劉淵の族子)・王弥(洛陽を陥れ、南宮に入り、太極の前殿に昇る。兵を縱ちて大いに掠め、悉く宮人珍宝を収む。曜は是に於いて諸王公及び百官已下三万余人を害し、帝を平陽に遷す。劉聰(前趙の第三代皇帝・昭武帝。劉

淵の第四子)帝を以て會稽公と為す」と。按ずるに劉元海(劉淵、字は元海。前趙の高祖)は本匈奴冒頓の後、曜は其の族子なり。

永嘉の頃の状況を簡単に記すと、次のようになる。

永嘉二年(308) 十月、漢王劉淵、平陽にて皇帝と称する。

永嘉三年(309) 正月、劉淵、平陽に遷都。この後、石勒・劉聰・王弥らを遣わしてしばしば晋を攻撃する。

永嘉四年(310) 七月、劉淵卒し、子の和が嗣ぐ。劉聰、兄の和を殺し、自立す。十月、石勒・劉曜・王弥ら洛陽に進攻。洛陽城内は飢饉に苦しみながらも堅く守る。

永嘉五年(311) 六月、劉曜・王弥、洛陽を陥落させ、官吏士民三万余人を殺す。懷帝捕虜となり、平陽に遷さる。十月、石勒、王弥およびその兵を殺す。

永嘉六年(312) 正月、劉聰、懷帝を會稽郡公とする。

永嘉七年(313) 正月、劉聰、懷帝を平陽に殺す。四月、晋の皇太子司馬鄴即位(愍帝)。興元と改元。

建興四年(316) 八月、劉曜、長安を囲む。十一月、晋の愍帝出でて降り、西晋滅亡。

この詩は永嘉の乱を描いたものであるが、陳注が西晋の滅亡を傷んだ作とし、李建崑注がテーマに触れていないのを除けば、各注釈書ともに永嘉の乱のことにかこつけて同時代を諷論したものと解釈している。ただ、唐代のどのような状況を諷論したかについては、注釈書によつて解釈が若干異なっている。

徐注と李樹政注においては、安祿山の反乱以後、異民族の入寇が相次ぎ、回紇の軍人が長安で傍若無人に振る舞つたり、吐蕃が二度にわたつて長安を陥落させたことを背景にした作とする。李冬生注では、安祿山が反乱を起こして長安を陥落させたことと、それ以降各地の方鎮が唐王朝の命令を無視して互いに抗争を続けていたことを批判したものと解釈している。さらに張修蓉『中唐樂府詩研究』では、この詩を「新題新意」の部分に分類した上で「旨在藉古諷今」(旨は古に藉りて今を諷するに在り)とし、「暴露戰爭罪惡的樂府詩」の部分で、この詩は永嘉の乱に借りて建中四年(783)の朱泚の乱を詠じたものであろうと解釈している。

以上のように諸説あるが、制作年代を推定できるような材料がないこともあり、具体的にどのような状況を描いているか確定するのは困難のようであ

る。ただ、以上の諸説の中では、張籍が十八歳の時に起こり強く印象づけられたと思われる、朱泚の乱を指すとする説が穏当かもしれない。いずれにせよ、単に永嘉の乱を描いたのみという訳ではなさそうである。この点については【補】で述べることとしたい。

【本文・書き下し文】

- | | |
|------------|-----------------------------|
| 1 黄頭鮮卑入洛陽 | 黄頭の鮮卑 ^{まび} 洛陽に入り |
| 2 胡兕持戟升明堂 | 胡兕 戟を持ち 明堂に升る ^{のぼ} |
| 3 晋家天子作降虜 | 晋家の天子 降虜と作り |
| 4 公卿奔走如驅羊 | 公卿奔走すること 羊を驅るが如し |
| 5 紫陌旌幡暗相觸 | 紫陌 旌幡 暗に相い触れ |
| 6 家家雞犬驚上屋 | 家の鶏犬 驚きて屋に上る |
| 7 婦人出門隨亂兵 | 婦人 門を出でて 乱兵に隨い |
| 8 夫死眼前不敢哭 | 夫 眼前に死するも 敢て哭さず |
| 9 九州諸侯自顧土 | 九州の諸侯 自ら土を顧み |
| 10 無人領兵來護主 | 人の 兵を領して来たりて主を護る無し |
| 11 北人避胡皆在南 | 北人 胡を避けて 皆 南に在り |
| 12 南人至今能晉語 | 南人 今に至るまで 晋語を能くす |

【口語訳】

- 1 黄色い頭の鮮卑族が 洛陽に進攻し
- 2 異民族どもは 武器を持って 明堂にまで上がり込んできた
- 3 晋朝の天子は 捕虜になつてしまひ
- 4 高官たちは 追い立てられたヒツジのように 走り回っている
- 5 都大路では やみくもに逃げまどう車の旗が ぶつかり合い
- 6 どの家でも 驚いたニワトリや犬が 屋根の上に跳び上がる
- 7 人妻は家から出ると 反乱軍の兵士に連れて行かれ
- 8 目の前で夫が死んでも 哭することもできない
- 9 全国各地の諸侯は 自分の土地のことばかり考えて
- 10 兵を率いてはせ参じ 天子を守る者などいない
- 11 北方の人々がみんな 異民族を避けて 南に移つたので
- 12 南方の人々は 今になつても 晋のことばが話せるのである

【押韻】

陽・羊―下平一〇陽 堂―下平一一唐 (同用)
 触―入声三燭 屋・哭―入声一屋 (古詩通押)
 土―上声一〇姥 主―上声九麌 (同用) 語―上声八語 (古詩通押)

【語釈】

1・2 黄頭鮮卑入洛陽、胡兕持戟升明堂
 「黄頭鮮卑」黄色い頭の鮮卑族。「鮮卑」は古代北方アジアの遊牧民族の一つで、後漢の頃には匈奴に従っていたが、匈奴が衰えると次第に強力になり、五胡十六国時代には前燕・後燕・南燕・西燕・西秦・南涼等の国を建てた。後の北朝の北魏・北斉・北周等も鮮卑系の諸族によつて建てられている。実際に西晋に侵入したのは、先に引いた『樂府詩集』の解題にもいうように匈奴系の劉淵らであるが、ここでは鮮卑を借りて表現していること、徐注に詳しい。

「黄頭」は、『史記』佞幸伝に「鄧通、蜀郡南安人也。以濯船為黄頭郎」(鄧通は、蜀郡の南安の人なり。船を濯するを以て黄頭郎と為る)と見える。『集解』に引く徐広の注に「黄頭、著黄帽也」(黄頭は、黄の帽を著くるなり)とあり、陳注はこれを引いている。すなわち、黄色い帽子をかぶっていると解しているようだ。

李冬生注は、唐王朝の正規軍が「黄頭軍」と呼ばれたという資料(『新唐書』王式伝)を引き、さらに漢代の羽林軍にも「黄頭」の称があったという資料(『漢書』枚乘伝)と、その蘇林の注に「羽林黄頭郎、習水戦者也」(羽林黄頭郎は、水戦を習う者なり)というのを引いている。すなわち、鮮卑の正規軍や戦闘にたけた精銳軍を指していると解釈したものであろうか。

さらに、両『唐書』には他にも北狄伝に、異民族の部族の一つとして黄頭の名が見えており、後に引く杜甫の「悲青坂」の注釈には、これが引かれている。一方、徐注と李樹政注は、鮮卑族の髪の毛が黄色いことから「黄頭鮮卑」というのだと解しているようだ。

管見の及んだ範囲では「黄頭鮮卑」という表現の例が、『異苑』巻四の説話に一例見えている。王敦が反乱を起こした後、晋の明帝がその様子を見に行つた。王敦はその時昼寝をしていたが、自分の城の周りを太陽が回っている夢を見て飛び起きると、「営中有黄頭鮮卑奴來、何不縛取」(営中に黄頭の鮮卑の奴の來たる有るに、何ぞ縛り取らざる)といったという。

この話は『晋書』明帝紀にも記されていて、そこでは「黄鬚の鮮卑の奴」

となつてゐるが、「帝母荀氏、燕代人。帝状類外氏、鬚黃。敦故謂帝云」(帝の母の荀氏は、燕の代の人なり。帝の状 外氏に類し、鬚黃なり。敦故に帝を謂いて云う)と、「黃鬚」を異民族の容貌の特徴としてゐる。

「黃頭鮮卑奴」に作る『異苑』においても同様に、「帝所生母荀氏、燕國人、故貌類焉」(帝 生む所の母の荀氏、燕國の人なり、故に貌類す)という但し書きが付いており、「黃頭」も異民族特有の風貌を述べていると解されてきたようだ。

この『異苑』の例からすると、黃頭というのは、異民族の特徴的風貌と解釈してよいように思われる。金髪のような、色の薄い頭髪のことをいうものである。

ここでは、これによつて、黄色い髪の意味で解しておいた。なお、「黃頭」には子供や童僕の意もあり、下の「胡兒」と同じようなニュアンスで「黃頭鮮卑」と表現されている可能性もある。

詩における「黃頭」の用例は、六朝詩では、晋の時代の民謡に見えるほか、梁の簡文帝の「長安有狹斜行」(『樂府詩集』三五)に「小息始得意、黃頭作弄臣」(小息 始めて意を得、黃頭して 弄臣と作る)というなどの用例がある。この簡文帝の例は、『史記』佞幸伝に基づいて、黄色い帽子をかぶつた黃頭郎の官を指したものが。

唐詩においては、李白の「酬張司馬贈墨」(王琦注本卷一九)に「黃頭奴子双鴉鬢、錦囊養之懷袖間」(黃頭の奴子 双鴉の鬢、錦囊 之を養う 懷袖の間)といい、杜甫の「悲青坂」(『詳註』四)に「黃頭奚兒日向西、教騎彎弓敢馳突」(黃頭の奚兒 日に西に向かい、教騎 弓を彎きて 敢て馳突す)というなどの用例がある。後者は安祿山軍の表現で、先に述べたように、両『唐書』北狄伝に基づいて、「黃頭」は「奚」とともに部族名と解されているが、吉川幸次郎氏『杜甫詩注』第三冊(筑摩書房、一九七九年)においては、仮の訳とした上で「ブロンドの若い」の訳語が当てられている。

張籍の「黃頭」の例はこれのみ。

「入洛陽」都の洛陽に進攻した。永嘉五年(311)六月、劉曜と王弥が洛陽に侵入したことを指している。

「胡兒」異民族の子供・若者。ただ、この場面でこの語が用いられているのは、侵入した軍隊に若者や子供がいることを指すのではなく、恐らく非難あるいは蔑視の口吻が含まれている。ここでは、「異民族ども」の語を当てておいた。

『史記』李將軍列伝に「広詳死、睨其旁、有一胡兒騎善馬」(広 詳り死

して、其の旁を睨るに、一胡兒の善馬に騎る有り)と、匈奴の子供に對して用いた例が見える。六朝詩においては、蔡琰作とされる「胡笳十八拍」第十三拍(『樂府詩集』卷五九)に「不謂殘生今却得旋歸、撫抱胡兒兮泣下沾衣」(謂わざりき 殘生 却つて旋歸するを得んとは、胡兒を撫抱すれば 泣下りて衣を沾す)の句が見える。

唐詩においては、陳注も引く李頎の「古從軍行」(『全唐詩』卷一三三)に「胡雁哀鳴夜夜飛、胡兒眼淚双双落」(胡雁 哀鳴して 夜夜飛び、胡兒の眼淚 双双落つ)といい、高適の「營州歌」(『全唐詩』卷二一四)に「虜酒千鐘不醉人、胡兒十歲能騎馬」(虜酒は千鐘なるも 人を酔わしめず、胡兒は十歳にして 騎馬を能くす)というなどの用例がある。

杜甫に「胡兒」の用例は二例、「寓目」(『詳註』卷七)に「羌女輕烽燧、胡兒制駱駝」(羌女 烽燧を軽んじ、胡兒 駱駝を制す)といい、「日暮」(同前卷八)には「羌婦語還哭、胡兒行且歌」(羌婦 語り還た哭し、胡兒 行き且つ歌う)という。いずれも秦州での作で、そこに暮らす異民族の子供に用いた例である。

張籍には他に三例、うち二例は辺塞を詠じた樂府における例。27「關山月」に「海辺茫茫天氣白、胡兒夜度黃竜磧」(海辺茫茫として 天氣白く、胡兒 夜に渡る 黃竜の磧)といい、30「將軍行」に「胡兒殺尽陰磧暮、擾擾唯有牛羊声」(胡兒 殺し尽くして 陰磧暮れ、擾擾として 唯だ牛羊の声有るのみ)という。これらはこの詩と同じく、非難・蔑視の意味を帯びているようである。

「持戟」戟を持つ。戟はほこの一種。「持戟」で兵士や守衛を指して用いる。

陳注も引く『孟子』公孫丑下に、「子之持戟之士、一日而三失伍、則去之否乎」(子の持戟の士、一日にして三たび伍を失わば、則ち之を去るや否や)という例がある。

六朝詩には例が見えず、唐詩においても数例に過ぎない。初盛唐には例が見えないようで、中唐に入つて、顧況の「宮詞五首」其五(『全唐詩』卷二六七)に「馬逢の作とする。『全唐詩』卷七七二)に「金吾持戟護新簷、天樂声伝万姓瞻」(金吾 戟を持って 新簷を護り、天樂 声は伝わりて 万姓瞻る)といい、王建の「元日早朝」(『王建詩集』卷三)に「將軍領羽林、持戟巡宮城」(將軍 羽林を領し、戟を持って 宮城を巡る)というなどの例が見えている。

杜甫には用例がないようだが、張籍には他に一例、440「洛陽行」に「六街朝暮鼓鞞鞞、禁兵持戟守空宮」(六街 朝暮 鼓鞞鞞たり、禁兵 戟を持って 空宮を守る)の句がある。

『全唐詩』は「執戟」に作る。「執戟」は20「節婦吟」に「妾家高樓連苑起、良人執戟明光裏」(妾が家の高樓は 苑に連なつて起ち、良人 戟を執る 明光の裏)と見えた。その「語釈」参照。なお、そこで張籍の「執戟」の他の例として「永嘉行」のこの句を引いたのは、『全唐詩』の本文によつたための誤りであり、正確にはこの句の「持戟」を『全唐詩』が「執戟」に作るとすべきであった。訂正しておきたい。

「升明堂」「明堂」は古代の帝王が政教を行うところで、朝会・祭祀・選士・養老などの国家の大典はこの堂において行われた。すなわち、王朝の統治の象徴ともいえる場所である。そこに武装した兵士が上がり込んできたことをいう。

「明堂」は、陳注も引く『孟子』梁惠王下に「夫明堂者、王者之堂也」(夫れ明堂なる者は、王者の堂なり)というなど、經書にも多くの例があり、『礼記』には明堂における諸侯の列位等について記した「明堂位」篇がある。

詩においても、古く班固に「明堂詩」(東都賦に付す。『文選』巻一)があり、「於昭明堂、明堂孔陽」(於 昭ける明堂、明堂は孔だ陽らかなり)の句がある。また李樹政注も引く「木蘭詩」(『樂府詩集』巻二五)にも「帰來見天子、天子坐明堂」(帰り来りて 天子に見ゆれば、天子 明堂に坐す)の句がある。

唐詩においても、楊炯の「出塞」(『全唐詩』巻五〇)に「明堂占気色、華蓋弁星文」(明堂 気色を占い、華蓋 星文を弁す)といい、王昌齡の「放歌行」(『全唐詩』巻一四〇)に「明堂坐天子、月朔朝諸侯」(明堂 天子坐し、月朔 諸侯に朝す)というなど、多くの用例がある。ただ、杜甫には例がなく、張籍にはこの例のみである。

「升明堂」の表現も他に一例あり、賈至の「閑居秋懷、寄陽翟陸贄府封丘高少府」(『全唐詩』巻二三五)に「解巾佐幕府、脱劍升明堂」(巾を解きて 幕府を佐け、劍を脱して 明堂に升る)という。この例で「劍を脱して」というように、神聖な場所であつて本来は武器を持つて登るのは許されない場所だったのであろうが、この「永嘉行」ではその明堂に異民族が武器を持つたまま上がり込むことが描写されている。

異民族の兵士が西晋の都洛陽に侵攻し、武装したまま統治の象徴である明堂に上がり込んだことを述べた冒頭の二句。乱の経緯は述べられず、最初から朝廷が制圧される様子を描いて、詩の舞台設定がなされている。

なお、先に述べたように、この詩は永嘉の乱を描きながら唐代の状況を描いたものとされているが、諸説あるうち、安祿山は、ソグド人と突厥人の混

血だということであり(藤善真澄氏『安祿山と楊貴妃—安史の乱始末記』、清水書院、一九八四年)、この二句で異民族として表現されていることと符合するといえよう。朱泚は、両『唐書』の本伝には「幽州昌平の人」と記されるが、異民族が多かったという安祿山軍に父が仕えたということであり、異民族とされていたのかもしれない。

3・4 晋家天子作降虜、公卿奔走如驅羊

「晋家天子」晋王朝の天子。晋の皇帝。西晋の懷帝を指す。晋王朝を「晋家」と表現した例としては、『晋書』周虓伝に、苻堅が周虓に「晋家元会何如此」(晋家の元会は何に何如)と尋ねたという逸話が記されるほか、六朝詩においては、隋の煬帝が牛弘に賜った詩(『北史』牛弘伝)に「晋家山吏部、魏代廬尚書」(晋家の山吏部、魏代の廬尚書)という句が見えている。

唐詩においては、劉希夷の「洛川懷古」(『全唐詩』巻八二)に「晋家都洛浜、朝廷多近臣」(晋家 洛浜に都し、朝廷に近臣多し)といい、李白の「金陵三首」其(王琦注本巻二二)に「晋家南渡日、此地旧長安」(晋家 南渡の日、此の地 旧長安)というなどの例がある。前者は西晋が洛陽に都したことをいい、後者はこの詩と同じく晋の東遷を背景にしており、南京に遷都したことをいうようだ。杜甫には用例がなく、張籍の例はこれのみ。

「○家天子」という表現の例としては、唐より前には、蔡琰の作とされる「胡笳十八拍」第十二拍(前出)に「東風応律兮暖氣多、知是漢家天子兮布陽和」(東風 律に応じて 暖氣多し、知る是れ 漢家の天子 陽和を布く)という例が見えるのみのようだ。

唐詩においては、王泠然の「汴堤柳」(『全唐詩』巻一一五)に「隋家天子憶揚州、厭坐深宮傍海游」(隋家の天子 揚州を憶い、深宮に坐するを厭い 海に傍つて遊ぶ)といい、王之渙の「涼州詞二首」其二(『全唐詩』巻二五三)に「漢家天子今神武、不肯和親歸去來」(漢家の天子 今神武、和親を肯んぜず 帰らんいざ)というなどの例が見えるほか、白居易の「長恨歌」(〇五九六)に「聞道漢家天子使、九華帳裏夢中驚」(聞道く 漢家の天子の使いと、九華帳裏 夢中に驚く)という例は有名である。

杜甫には「天子」の例は多いが「○家天子」の例はなく、張籍にはもう一例、34「妾薄命」に「無事従軍去万里、漢家天子平四夷」(事無くして 軍に従い 去ること万里、漢家の天子 四夷を平らぐ)の句がある。

「降虜」降伏した捕虜。

『史記』太史公自序に「二世受運、子嬰降虜」(二世 運を受け、子嬰

降虜たり」という例がある。蔡琰の「悲憤詩」(『後漢書』蔡琰伝)にも「失意機微間、輒言斃降虜」(意を機微の間に失すれば、輒ち言う 斃降虜と)の句がある。

六朝詩においては、隋の煬帝の「白馬篇」(『文苑英華』卷二〇九。『樂府詩集』卷六三)は南齊の孔稚珪の作とする。「輪台受降虜、高闕斬名王」(輪台 降虜を受け、高闕 名王を斬る)という一例を見るのみ。

唐詩においては、蘇晋の「奉和聖製送張巡迎」(『全唐詩』卷一一一)に「亟聞降虜拜、復睹出師篇」(亟しば聞く 降虜の拜するを、復た睹る 出師の篇)といい、岑参の「北庭西郊侯封大夫受降回軍献上」(『岑参集校注』卷二)に「甲兵未得戰、降虜来如歸」(甲兵 未だ戦うを得ざるに、降虜 来たること 歸するが如し)というなどの例がある。

杜甫には二例、「遣興三首」其二(『詳註』卷七)に「降虜東擊胡、壯健尽不留」(降虜 東のかた胡を撃ち、壯健 尽く留まらず)といい、「秦州雜詩二十首」其三(同前卷七)に「降虜兼千帳、居人有万家」(降虜 千帳を兼ね、居人 万家有り)という。前者は秦州にいる異民族を降虜といい、安史の乱軍を胡といっているとされる。後者はたくさんのテントがすべて降参した捕虜のものという例とされる。

張籍の「降虜」の例はこれのみ。

〔公卿〕三公九卿の略称。三公は周代以来の最高級の三つの官位、九卿はそれに次ぐ九つの高級官位。ともに時代によって官職名は異なるが、非常に高い官職であり、そこから高位高官を指して用いられる。

古く『儀礼』・『礼記』等の経書の中にも多くの用例がある。『論語』子罕にも「出則事公卿、入則事父兄、喪事不敢不勉」(出でては則ち公卿に事え、入りては則ち父兄に事え、喪事には敢て勉めずんばあらず)という。

六朝詩においては、謝朓の「始之宣城郡詩」(『謝宣城集校注』卷三)に「疏散謝公卿、蕭条依掾吏」(疏散 公卿に謝し、蕭条 掾吏に依る)といい、江淹の「雜體詩三十首」其十三「左記室詠史」(『文選』卷三一)に「王侯貴片議、公卿重一言」(王侯は片議を貴び、公卿は一言を重んず)というなどの用例がある。

唐詩においても、盧照隣の「行路難」(『全唐詩』卷四一)に「自昔公卿二千石、咸擬榮華一万年」(昔より 公卿 二千石、咸な擬す 榮華 一万年)といい、王維の「濟上四賢詠」三首其二「成文學」(『趙本卷五』)に「使氣公卿八坐、論心遊俠場」(氣を使す 公卿の坐、心を論ず 遊俠の場)というなど、多くの用例がある。

杜甫の詩中に四例見えるうち、「狂歌行贈四兄」(『詳註』卷一四)に「公

卿朱門未開鎖、我曹已到肩相齊」(公卿の朱門 未だ鎖を開かず、我が曹 已に到り 肩相い齊し)というのは、新題の樂府の中で高位高官の人物を指して用いた例といえよう。

張籍には他に三例、196「喜王起侍郎放牒」に「共賀春司能鑑識、今年定合有公卿」(共に賀す 春司 能く鑑識するを、今年 定めて合に 公卿有るべし)というなど、いずれも近体の徒詩の例。

〔奔走〕走り回ること。ここでは反乱への対応に迫られて忙しく走り回るとも解せるし、逃げまどうとも解せよう。

すでに『尚書』『礼記』等に見える古いことばで、『毛詩』周頌「清廟」にも「对越在天、駿奔走在廟」(天に在るに对越し、駿かに奔走して廟に在り)と見え、『楚辞』離騷にも「忽奔走以先後兮、及前王之踵武」(忽ち奔走して以て先後し、前王の踵武に及ばんとす)とある。

ただ、六朝詩にはほとんど用例が見当たらず、隋の牛弘の「太廟歌辞」の「迎神歌辞」(『隋書』音楽志下)に「官聯式序、奔走在庭」(官聯して式で序し、奔走して 庭に在り)という例が見えるのみのようだ。

唐詩においては、魏知古の「從獵渭川献詩」(『全唐詩』九一)に「奔走未及去、翺飛豈暇翔」(奔走して 未だ去るに及ばず、翺飛して 豈に翔るに暇あらんや)といい、李白の「猛虎行」(王琦注本卷六)に「巨鼈未斬海水動、魚龍奔走安得寧」(巨鼈 未だ斬らざるに 海水動き、魚龍 奔走して 安くんぞ寧きを得ん)というなどの例がある。

杜甫の詩中に八例あるのは、唐の詩人でも最も多いようであり、杜甫が好んで用いた詩語といえるかもしれない。そのうち「逃難」(『詳註』卷二三)に「疏布纏枯骨、奔走苦不暖」(疏布 枯骨に纏い、奔走して 暖かならざるに苦しむ)という例などは、世難を避けてあちこちに逃げることを表現したもので、この句と似通った例といえよう。

張籍の例はこれのみ。
蜀本・静嘉堂本等は「奔走」に作る。こちらであれば、「齊しく走る」、みんな揃って走り回る(あるいは逃げ出す)意にならうか。また『全唐詩』ではこの句に注して「一作尽去驱牛羊」といっており、これによれば「尽去」に作るテキストもあつたようである。

〔如驱羊〕羊を追い立てているようだ。

この部分には異同が多く、蜀本・静嘉堂本等は「如牛羊」に作り、『唐詩百家全集』では「驱牛羊」に作っていて、先に引いた『全唐詩』注と一致する。徐注は「如牛羊」に作る本文をテキストとし、「如驱羊」「驱牛羊」に

作るものを「非也」としてしりぞける。

しかし、「如驅羊」でも解釈は十分に可能だと思われるので、ここではテキストにしたがって「驅羊」として解釈しておいた。

「驅羊」は、古く『戦国策』中山策に、斉が趙・魏と結んで中山国を討とうとした時、それを恐れた中山君が斉に遣わした張登という人物のことばに、「是君為趙・魏驅羊也、非齊之利也」(是れ君 趙・魏の為に羊を驅るなり、齊の利に非ざるなり)と見えているなどの例がある。三国で中山を追い込むと、かえって中山は趙・魏に近づくようになることばである。

六朝詩においては、梁の鼓角横吹曲の「地驅歌樂辭」四首其二(『樂府詩集』卷二五)に「驅羊入谷、白羊在前」(羊を驅って谷に入り、白羊 前に在り)とあるのが唯一の例のようである。なお、『樂府詩集』は「白羊」を「自羊」に作るが、小尾郊一・岡村貞雄『古樂府』(東海大学出版会、一九八〇年)に従って改めた。

唐詩においても用例は少なく、以前の例としては王勃の「出境遊山二首」其一(『全唐詩』卷五六)に「驅羊先動石、走兔欲投巾」(羊を驅らんとして先ず石を動かし、兔を走らんとして 巾を投ぜんと欲す)という例があるのみのようである。羊飼いの黄初平が羊を石に変えていたという故事に基づく例。

杜甫には例がなく、張籍もこれのみである。

ただ、張籍の友人でもある王建には、「塞上逢故人」(『王建詩集』卷五)に「走馬登寒壘、驅羊入廢城」(馬を走らせて 寒壘に登り、羊を驅って廢城に入る)というなど二例の用例がある。

「牛羊」であれば、古く經書に見えることばで、多くの用例がある。

『毛詩』にも小雅「楚茨」に「濟濟踰躄、絜爾牛羊」(濟濟踰躄、爾の牛羊を絜くす)というなど数例が見え、六朝詩では、王微の「雜詩」(『文選』卷三〇)に「日聞牛羊下、野雀滿空園」(日聞れて 牛羊下り、野雀 空園に滿つ)というなどの例がある。また、「敕勒歌」(『樂府詩集』卷八六)に「天蒼蒼、野茫茫、風吹草低見牛羊」(天は蒼蒼、野は茫茫、風吹き草低れて 牛羊を見る)という例も名高い。

唐詩においては、張説の「岳州行郡竹籬」(『全唐詩』卷八六)に「預絶豺狼憂、知免牛羊恐」(預め 豺狼の憂いを絶ち、牛羊の恐れを免るを知る)といい、王維の「田園樂七首」其四(趙本卷一四)に「牛羊自歸村巷、童稚不識衣冠」(牛羊 自ら村巷に帰り、童稚 衣冠を識らず)というなどの用例がある。

杜甫には四例、「秦州雜詩二十首」其十(『詳註』卷七)に「煙火軍中幕、牛羊嶺上村」(煙火 軍中の幕、牛羊 嶺上の村)という例が、軍中の炊飯

の様子と対にして農村の穏やかな風景を描写しているのを初め、いずれも平穩な田園風景を描写するのに用いているようだ。

張籍には他に四例、いずれも穏やかな田園風景というイメージからや外れるもののようなだが、先にも引いた30「將軍行」の例に「胡兒殺尽陰磧暮、擾擾唯有牛羊声」(胡兒 殺し尽くして 陰磧暮れ、擾擾として 唯だ牛羊の声有るのみ)というのは、人間が死に絶えた後に牛や羊だけが残った陰惨な風景を詠じるのに用いているようだ。

なお、詩において「驅牛羊」と表現した例は、唐以前以後を通じて見当たらないようである。

冒頭の二句を承けて、天子が捕虜となったことと高官たちの狼狽ぶりを描くことよって、反乱を描写した二句。「晋家天子」と四字を用いて重々しく表現することよって、最高統治者である天子が捕虜となった哀れさが強調されているようであり、その衝撃の大きさは、次の句の公卿たちが羊のように奔走する描写によつて表現されている。ここまですべて一韻となつており、朝廷内の様子を描いているといえよう。

5・6 紫陌旌幡暗相触、家家鷄犬驚上屋

「紫陌」京師の道路。都大路。「紫宸殿」の語があるごとく、紫は瑞気の色であること、諸注釈書が指摘する通りである。ただ、中国の注釈書では主に京師の郊外の道と解されているようだ。

古書には用例がなく、梁の頃から詩文に散見することばのようである。六朝詩における用例としては、劉孝綽の「春日從駕新亭應制」(『文苑英華』卷一七八)に「紆餘出紫陌、迤邐度青樓」(紆餘として 紫陌を出で、迤邐として 青樓を度る)の句があり、江総の「長安道」(同上卷一九二)に「轟轟紫陌上、藹藹紅塵飛」(轟轟たる 紫陌の上、藹藹として 紅塵飛ぶ)の句がある。

唐詩にも初唐の頃から多くの用例があるが、ここでは諸注釈書の引く例を挙げることにする。杜甫の「醉為馬墜、諸公携酒相看」(『詳註』卷一八)に「江村野堂爭入眼、垂鞭鞚凌紫陌」(江村 野堂 争つて眼に入り、鞭を垂れ 鞚を鞚れて 紫陌を凌ぐ)といい、賈至の「早朝大明宮呈兩省僚友」(『全唐詩』卷二三五)に「銀燭熏天紫陌長、禁城春色曉蒼蒼」(銀燭 天を熏じて 紫陌長し、禁城の春色 曉に蒼蒼たり)といい、劉禹錫の「元和十一年、自朗州承召至京、戲贈看花諸君子」(『箋註』卷二四)に「紫陌紅塵扶面來、無人不道看花回」(紫陌紅塵 面を払って來たり、人として花を見て回ると道わざる無し)という。

以上のうち、杜甫の例は夔州時代の作とされており、夔州の道を誇張して表現したもののようであるが、その他の例は、都の町中の道を表現していると解してよいように思われる。ここでも特に郊外とする必要はないのではないだろうか。

〔旌旗〕「旌旗」に作るテキストもあるが、同じ。李樹政注によれば、旗の総称。李冬生注によれば、「旌」は牛の尾と美しい鳥の羽を竿の先に飾った旗、「旗」は、長い布を下に垂らした旗、と細かく区別する。さらに李冬生注は「王公大臣的儀仗」としており、これによれば王侯貴族や高位高官の人物たちの旗印ということになる。庶民はもちろん旗など立てることはなからうから、地位のある人たちの混乱の様子を描いているといえるだろう。

古書に用例が見えず、張籍以前の詩にも用例が見当たらないことば。晩唐になると、雍陶の「贈金河戍客」(『全唐詩』卷五一八)に「戍遠旌旗少、年深帳幕低」(戍遠くして 旌旗少なく、年深くして 帳幕低し)というなど、数例が見えている。

〔暗相触〕李冬生注に「指昏乱。又指黑夜」というように、むやみに逃げまどう人々の旗印がぶつかりあうこと、あるいは夜の闇の中でぶつかりあうことをいうのであろうか。いずれにせよ、非常に混乱していることを描写しているのは間違いないさそうである。

〔家家〕どの家も。7 「征婦怨」に「万里無人收白骨、家家城下招魂葬」(万里 人の白骨を収むる無く、家家 城下にて 魂を招きて葬る)の句があり、12 「築城詞」に「家家養男当門戸、今日作君城下土」(家家 男を養いて 門戸に当つるに、今日 君が城下の土と作る)の句があった。その【語釈】参照。

〔鶏犬驚上屋〕ニワトリや犬が驚いて屋根の上に跳び上がる。前の句で述べられた、逃げまどう人々に驚くのであろう。貴人の家の鶏小屋や犬小屋の屋根という可能性もあるが、恐らくニワトリや犬でも跳び上がれるような、庶民の家の低い屋根を詠じたものであり、前の句の高い地位の人物たちと対比的な描写となっているのであろう。

『老子』八十章(二十二子本)に「隣国相望、鶏犬之声相聞、民至老死不相往来」(隣国相い望み、鶏犬の声相い聞こゆるも、民 老死に至るまで相い往来せず)といい、陶淵明の「桃花源記」(『陶淵明集校箋』卷六)に「阡陌交通、鶏犬相聞」(阡陌 交わり通じ、鶏犬 相い聞こゆる)というように、

平穏な生活の象徴として用いられる。河田聡美氏「イヌのいる風景―唐詩に描かれたイヌたち」(『中唐文学の視角』所収。創文社、一九九八年)に詳しい。

ユーモラスな感じがしないでもない表現だが、平穏な生活の象徴である鶏犬が驚いて屋根の上に跳び上がるということ、混乱を詠じたシリラスな描写なのであろう。

前の四句で朝廷内を描いたのに続き、以下四句では洛陽城内の混乱ぶりを描く。この二句はその前半部分で、城内の様子を描く。前の句、あたふたと逃げ回りぶつかり合う旗の描写、高い地位の人々の混乱ぶり。後の句、混乱に驚いて屋根に跳び上がるニワトリや犬の描写、庶民の家の驚く様子。

7・8 婦人出門随乱兵、夫死眼前不敢哭

〔婦人出門随乱兵〕「出門」は14「別離曲」に「行人結束出門去、幾時更踏門前路」(行人 結束して 門を出でて去る、幾時か 更に踏む 門前路)と見えた。その【語釈】参照。

ここでは婦人の描写であり、ここでわざわざ「出門」というのは、「普段は門から出ないのに」という気持ちが含まれている。

〔乱兵〕は反乱軍の兵士。『春秋』昭公十九年の『左伝』に「民有乱兵、猶憚過之」(民に乱兵有るも、猶お之を過ぐるを憚る)と見える古いことば。『後漢書』董卓伝に「乱兵入殿、掠宮人・什物」(乱兵 殿に入り、宮人・什物を掠む)というなど、史書にはしばしば見えるが、六朝までの詩には見当たらないようだ。

唐詩においても、杜甫以前には例が見られないようである。杜甫には三例あり、一例を挙げれば、「破船」(『詳註』卷一三)に「蒼皇避乱兵、緬邈懷旧丘」(蒼皇として 乱兵を避け、緬邈 旧丘を懐う)という句がある。安史の乱の反乱軍を避けて慌てて逃げたため、旧居のことがはるかに懐かしく思ひ出されるという例。

張籍にはもう一例、418 「董逃行」に「洛陽城頭火燭燭、乱兵燒我天子宫」(洛陽城頭 火燭燭たり、乱兵 我が天子の宮を焼く)という。

この句について、徐注は「逃難的婦人出門奔走与乱兵相雜」といい、李樹政注は「婦女逃出門、跟着乱兵混雜在一起逃難」といい、逃げ出した女性が乱兵と入り交じっている様子の描写ととらえる。

しかしここでは、家を出たとたん乱兵に捕らえられ、連れて行かれる様子とも解しうるのではないだろうか。女性の掠奪は、戦乱においては常に行われることであり、下の「不敢哭」とも繋がりがやすいように思われる。また、

こう解した方が悲惨さもさらに深まるのではないだろうか。

「乱兵」が女性を掠奪したことを詩に詠じた例としては、同時代の孟郊の「傷春」(『全唐詩』卷三七四)に「乱兵殺兒將女去、二月三月花冥冥」(「乱兵 兒を殺し 女を將いて去り、二月三月 花冥冥たり」という句がある。

「夫死眼前不敢哭」夫が目の前で死んでも、哭することもできない。女性の悲惨な運命を詠ずる。「夫」が「死」ぬのは、反乱軍に殺されるのである。「哭」は声を上げて泣くこと。「敢て哭」しないのは、反乱軍に捕らえられていて、おっぴらに嘆く訳にはいかないからであろうか。

詩において、「夫死」という簡潔で強い表現をした例は、張籍以前に見当たらない。似た例として挙げられるのは、杜甫の「遣遇」(『詳註』卷二二)に「丈夫死百役、暮返空邨号」(丈夫 百役に死し、暮れに返りて 空邨に号す)という例であろうか。放浪生活の途中に見かけた、採蔴の寡婦を描いた例。

張籍は、7「征婦怨」でも「夫死戦場子在腹、妾身雖存如昼燭」(夫は戦場に死して 子は腹に在り、妾身 存すと雖も 昼の燭の如し)とこの表現を用いていた。その「語釈」も参照。さらに、431「山頭鹿」にも「貧兒多租輸不足、夫死未葬兒在獄」(貧兒 租多くして 輸すも足らず、夫は死して未だ葬らず 兒は獄に在り)と用いている。

杜甫と張籍の他に、夫が死ぬ意味で詩中に「夫死」を用いた例は、元稹・劉言史・皮日休にそれぞれ一例を見るのみのものであり、張籍が好んで用いた表現といえるかもしれない。

「眼前」は常見の語。詩においても、六朝では謝靈運の「石壁立招提精舍」(『古詩紀』卷五八)に「浮歛昧眼前、沈照貫終始」(浮歛 眼前を昧くし、沈照 終始を貫く)といい、唐では張渭の「湖中对酒行」(『全唐詩』卷一九七)に「眼前一尊又長滿、心中万事如等閑」(眼前の一尊 又た長えに滿つ、心中の万事 等閑の如し)というなど、多くの用例がある。

杜甫には八例、中でも「茅屋為秋風所破歌」(『詳註』卷一〇)に「嗚呼、何時眼前突兀見此屋、吾廬獨破受凍死亦足」(嗚呼、何れの時か 眼前に 突兀として此の屋を見ん、吾が廬は独り破れて 凍死を受くるも亦た足れり)という例は名高い。

張籍に他に二例あるうち、29「白頭吟」に「人心回互自無窮、眼前好惡那能定」(人心 回互して 自ずから窮まり無し、眼前の好惡 那ぞ能く定めん)というのは、楽府における用例である。

前の二句と一韻、洛陽城内の描写の後半部分。前の二句では町全体を描い

た表現になっていたが、この二句では女性にスポットを当てて、その悲惨な運命を描く。普段は門から出ることもない婦人が、反乱軍に捕らえられて連行される。夫は目の前で殺されるが、声を上げて泣くこともできない。

9・10 九州諸侯自顧土、無人領兵來護主

「九州」古代、中国全土を九の州に分けたことに基づいたことば。すなわち中国全土を指す。『尚書』禹貢に見え、その他の経書および諸書に多くの用例が見える。

詩における古い例としては、阮籍の「詠懷詩十七首」其十五(『文選』卷二三)に「登高望九州、悠悠分曠野」(高きに登りて九州を望めば、悠悠として曠野分かる)という例がある。

唐詩においても多くの例があり、盧照隣の「登封大酺歌四首」其一(『全唐詩』卷四一)に「九州四海常無事、萬歲千秋樂未央」(九州 四海 常に事無く、萬歲 千秋 樂しみ未央きず)の句がある。また王維の「送秘書晁監還日本國」(趙注本卷二二)に「九州何処遠、萬里若乘空」(九州 何れの処か遠き、萬里 空に乗るが若し)という例は『唐詩選』に選ばれて我が国でも名高い。

杜甫には、「憶昔二首」其二(『詳註』卷一三)に「九州道路無豺虎、遠行不勞吉日出」(九州の道路に 豺虎無く、遠行に勞せず 吉日に出づるを)というなど、五例の用例があるが、張籍の例はこれのみである。

「諸侯」侯に封ぜられた者たち。これも常見の語で、古く『毛詩』小雅「雨無正」に「邦君諸侯、莫肯朝夕」(邦君諸侯も、肯て朝夕する莫し)というなど、多くの用例がある。

その後も、六朝では曹操の「短歌行」(『宋書』樂志)に「九合諸侯、一匡天下」(諸侯を九合し、一たび天下を匡す)といい、唐では王維の「奉和聖製暮春送朝集使歸郡應制」(趙本卷一一)に「玉乘迎大客、金節送諸侯」(玉乘 大客を迎え、金節 諸侯を送る)というなどの用例がある。『唐詩選』にも収められる後者の例には、直後に「祖席傾三省、襄帷向九州」(祖席三省を傾け、襄帷 九州に向かう)と「九州」の語を用いる句がある。

杜甫には十六例、そのうち「短歌行、贈王郎司直」(『詳註』卷一一)に「西得諸侯掉錦水、欲向何門跋珠履」(西のかた諸侯を得て 錦水に掉ささば、何れの門に向かつてか 珠履を跋まんと欲する)という例は、『唐詩選』に採られて我が国でも親しまれている。張籍にはほかに一例、445「董公詩」の冒頭に「誰主東諸侯、元臣隴西公」(誰か 東諸侯に主たる、元臣 隴西公)という。「諸侯」の語は、唐詩においては節度使を称するのに用いられるこ

とが多く、上に引いた杜甫の「短歌行」も張籍の「董公詩」のもその例である。

なお「九州諸侯」の例は、『金樓子』興王篇の周文王の条に「文王在鄆、九州諸侯咸朝」(文王 鄆に在り、九州の諸侯 咸な朝す)という例が見えるが、詩における用例は、六朝・唐を通じて見当たらないようだ。

〔自顧土〕自分の領土のことばかり考えている。李冬生注にいうように、西晋の末年には「八王の乱」が起こり、政局は混乱を極めていた。そのことを詠ずることによって、安史の乱以後の藩鎮割拠の状態を詠じているとされる。

「顧土」の表現は、『春秋』成公二年の『左伝』に「唯吾子戎車是利、無顧土宜」(唯だ吾子は戎車を是れ利とし、土の宜しきを顧みる無し)と「顧土宜」の形で古い例が見えるが、詩における用例としては、同時代の柳宗元の「弘農公以碩德偉材、屈於誣枉、左官三歲、復為大僚、天監昭明、人心感悅、宗元竄伏湘浦、拜賀末由、謹獻詩五十韻、以畢微志」(中華書局『柳宗元集』卷四二)に「顧土雖懷趙、知天詎畏匡」(土を顧みて 趙を懷うと雖も、天を知りて 詎ぞ匡に畏せん)という例以外は見当たらないようだ。この詩は左遷先から許されて王の傅となつた楊憑に献じられた詩で、京兆尹を左遷されて地方に赴任している頃を描写した部分。前の句は、もと趙の将であつた廉頗が、迎えられて楚の将となつたが功績がなく、趙の人を用いたいと語つたという故事に基づき、後の句は、孔子が匡の地で陽虎と間違えられて取り囲まれたが、天命を信じて動じなかつたという故事に基づく。なお、楊憑の左遷に関しては、張籍も24「傷歌行」の詩を作っている。

「自顧土」、蜀本と『唐文粹』は「自曠土」に作り、四庫全書本は「驚曠土」に作る。

「曠土」であれば、『礼記』王制に「無曠土、無游民」(曠土無く、游民無し)と見える。これは、むなしく荒れている土地・休閒地の意。六朝詩には用例がなく、『全唐詩』に重複を除けば二例ある例も、その方向の意味である。この詩を「曠土」で読むとすれば、土地を拓げるといふ方向で解することになるか。四庫全書本の「驚」は、第六句の「驚上屋」の表現に引かれて誤つたものであろうか。

〔無人領兵来護主〕兵を率いて天子を守ろうとする者はいなかつた。

「領兵」の語は『後漢書』等の歴史書や六朝期の文などにもすで見えてゐるが、詩における用例は、張籍以前には見当たらないようである。張籍の例もこれのみ。

「護主」の方はさらに例が少なく、官名の「領護主簿」等の例を除けば、

文章にも用例がほとんど見当たらないようである。管見の及んだ限りでは、張籍以前には張説の「時樂鳥篇」(『全唐詩』卷八六)の序文に「其心聡性弁、護主報恩、固非凡禽」(其の心は聡く性は弁らかにして、主を護りて恩に報い、固に凡禽に非ず)という例を見るのみの方だ。張籍の例もこれのみである。「来護主」を蜀本は「土護主」に作り、静嘉堂本・四庫全書本は「来顧主」に作るが、これらは上の「自顧土」に引かれたための誤りであろう。

国家全体を描いた、末尾の四句の前半部分。この危難にも諸侯たちは見て見ぬふり、自分の領土のことばかり考えて、天子を守ろうと立ち上る者はなかつたことを述べる。非難のニュアンスが感じられる表現であり、永嘉の乱を通して唐代のことを詠じているとすれば、藩鎮たちへの強い批判とも解することができよう。

11・12 北人避胡皆在南、南人至今能晋語

〔北人避胡皆在南〕北方の人々が異民族(による支配)を避けて、みんな南へと向かつた。晋の南遷を指しているとともに、徐注にいうように、安史の乱以後の戦乱の中、多くの北方人が南方に移住したことを暗に指している。白居易・劉禹錫といった人々の家も南方に移住していたことが知られている。

なお、「多在南」に作るテキストもある。

「北人」・「南人」の表現は、やはり晋の東遷以降用例が多くなるようである。例えば『晋書』鄧攸伝に「訊其家屬、説是北人遭乱」(其の家屬を訊ぬるに、是れ北人にして乱に遭うと説く)といい、同書涼武昭王李玄盛伝に「皆徙之于酒泉、分南人五千戶置会稽郡」(皆な之を酒泉に徙し、南人五千戶を分ちて会稽郡を置く)というなどの例がある。

ただ、詩においては、ともに初唐以前の例は見当たらないようである。盛唐になつて、杜甫の「秋尽」(『詳註』卷一一)に「雪嶺独看西日落、劍門猶阻北人来」(雪嶺 独り看る 西日の落つるを、劍門 猶お阻む 北人の来たるを)といい、高適の「餞宋八充彭中丞判官之嶺南」(『全唐詩』卷二一四)に「北雁送馳駟、南人思飲氷」(北雁 駟を馳するを送り、南人 氷を飲むを思ふ)というなどの例が見えるようになる。

この詩のように「北人」と「南人」を対にして用いた例は、前の時代には見えず、同時代の劉禹錫の「蹋歌詞四首」其四(『箋證』卷二六)に「日暮江南聞竹枝、南人行樂北人悲」(日暮 江南 竹枝を聞く、南人は行樂し 北人は悲しむ)といい、「竹枝詞九首」其一(同前卷二七)に「南人上来歌一曲、北人陌上動鄉情」(南人 上り来りて 一曲を歌えば、北人 陌上に

郷情を動かす」といい、白居易の「山鷓鴣」(〇五九〇)に「唯能愁北人、南人慣聞如不聞」(唯だ能く北人を愁えしめ、南人は聞くに慣れて聞かざるが如し)というなどの例が見えるようになる。

杜甫には「北人」の例は先に挙げた「秋尽」の一例のみで、「南人」の例はない。

張籍が「北人」と「南人」を対にして用いる例はこの例のみ。「北人」の例は「山北の人」の一例を除いてほかに二例、一例を挙げれば、76「嶺表逢故人」に「炎州望郷伴、自識北人衣」(炎州 郷伴を望み、自ずから識る北人の衣)の句がある。「南人」の例はほかには「江南の人」の例があるのみ。

「避胡」、「避胡塵」の形を除けば、詩における以前の用例は、杜甫に一例(文字の異同のある例を除く)、「哀王孫」(『詳註』巻四)に「又向人家啄大屋、屋底達官走避胡」(又た人家に向かいて 大屋を啄み、屋底の達官 走りて胡を避く)という句が見えるのみのものである。安祿山軍の侵攻を表現した例。

〔南人至今能晋語〕南方の人は今でも北方の晋(西晋)のことばを話す。

「晋語」は『国語』の篇名以外には以前の用例が見当たらないようで、詩における用例も、六朝く唐代を通じてこのほかに未見だが、李冬生注がいうように、「中原語音」すなわち北方語音(≒地域的差異)を指すのであろう。李樹政注は晋の時代の言語と解するが、晋の時代の言語のこと(≒時代的差異)は唐代には分からなくなっていたのではないだろうか。

末尾の二句、前の二句と一韻で、国家全体を視野に入れて描いたものだが、ここではさらに時間の要素が加わり、過去から現在までのことを述べている。ただ、この最後の二句は今でも南方に北方のことばが残っていることを詠じていて、何が言いたいのがよく分からない。

戦乱の影響はいつまでも長く残るのだということであろうか。あるいは、数百年後まで影響が残るような、大きな混乱ぶりだったということであろうか。または、この詩が唐代のことを暗に詠じているとすれば、李樹政注にいうように、安史の乱やその後の混乱によって多くの士族が南方に逃れたため、国家を統一できず社稷を再興できないということであろうか。

それらのいずれに解するにせよ、ことばの変化で描写するよりも、もっと切実で適当な表現があるように思う。ここまで反乱軍の様子や大臣・貴顕・鶏犬・女性・諸侯などの反応によって反乱の様子を描写してきた詩の結びとしては、唐突な感じが否めないように感じるのだが、いかがであろうか。

【補】

一 構成について

この詩は、押韻によって四句ずつに分けられる。前半八句は内容も四句ずつでまとまっており、さらに二句ずつに分けられよう。

1～4句 宮中の混乱

5～8句 洛陽城内の混乱 (前半は異民族の侵入、後半は天子の命運と高位高官の狼狽)

9～12句 中国全土の混乱ぶり (前半は街頭の様子、後半は女性をクロースアップ)

(前半は諸侯の無関心ぶり、後半は現在に至る影響)

ただ、先にも述べたように、最後の二句は唐突な印象があり、何が言いたいかよく分からない。これまでもしばしば触れたように、印象深い末尾の二句を工夫するのが張籍詩の特色の一つであったが、この詩においてはあまり成功していないように思われる。

二 「永嘉行」について

ここでは、楽府題の「永嘉行」について、「題解」で触れなかったことを記すとともに、関連作品を挙げることにしたい。

まず、「永嘉行」のように年号を用いた楽府題の例を見ておこう。

年号と楽府題が同じという場合、郊廟歌辞等に用いられる「永和」「太和」といった題名が年号においても用いられるという例や、鮑照に「中興歌」があり西燕の年号にも「中興」があるといった例、魏の明帝が太和に改元した時に鼓吹曲辞「太和」が作られたというような例などがほとんどである。

そういった例は除き、「永嘉行」のように、その時代のことを詠ずるのに年号の楽府題が用いられた例は、管見の及ぶ限りでは中唐以前には用例がないようだ。中唐になって、この「永嘉行」や韓愈の「永貞行」(『繫年集釈』巻、「樂府詩集」には未収)が作られている。ただ張籍の「永嘉行」が約五百年前という遠い過去の年号であるのに対し、韓愈の「永貞行」は、この詩が作られこの詩に詠じられた時代の年号となっている。

また、特殊な例として李賀の「章和二年中」(『樂府詩集』卷五三)が挙げられよう。「章和」は後漢の章帝の年号で、二年は西暦八八年に当たる。『樂府詩集』の解題によれば、この曲は擊舞曲の古曲の名で、魏の時に「太和有聖帝」と改められ、晋になって「天命篇」と改められたようである。李賀はその古い題名を用いて、天下太平の様子を詠じている。

次に、詩における「永嘉」の語の用例について、見ておこう。六朝以前の詩において、詩中に用いられた「永嘉」の例は、次二例が残されているようだ。すなわち、謝靈運の「述祖德詩二首」其二(『文選』卷一九)に「崩騰永嘉末、逼迫太元始」(崩騰す 永嘉の末、逼迫す 太元の始め)といい、庾信の「和張侍中述懷」(『庾子山集注』卷三)に「永嘉独流寓、中原惟鼎鑊」(永嘉 独り流寓し、中原 惟だ鼎鑊のごとし)という例である。ともに年号で、永嘉の乱を指して用いた例。

詩題については、「懷帝永嘉末童謡」というような例がほとんどであり、その例をのぞけば、謝靈運の「登永嘉綠嶂山詩」(『古詩紀』卷五七)、何遜の「学古、贈丘永嘉征還」(『古詩紀』卷九三)、徐陵の「別毛永嘉」(『徐孝穆集箋注』卷一)、いずれも地名の永嘉の例である。

唐に入っても、詩題における例では、張子容の「永嘉作」(『全唐詩』卷一六)や孟浩然の「宿永嘉江、寄山陰崔少府国輔」(『全唐詩』卷一六〇)などのように地名がほとんどであって、六朝と同じ状況である。ただ、詩中における例においても多くは地名の永嘉を指すようになり、さらに、しばしば永嘉太守であった謝靈運を指して用いられるようになる。庾光先の「奉和劉採訪縉雲南嶺作」(『全唐詩』卷一五八)に「百越城池枕海圻、永嘉山水復相依」(百越の城池 海圻に枕し、永嘉の山水 復た相い依る)という例は地名としての例であり、李嘉祐の「送舍弟」(『全唐詩』卷二〇七)に「諸謝偏推永嘉守、三何独許水曹郎」(諸謝 偏に推す 永嘉の守、三何 独り許す 水曹の郎)という例は謝靈運のことを指している。

このような状況は中唐においてもほぼ同様で、年号としての永嘉を用いる例はほとんどないようである。もちろん「永嘉」の語を用いずに晋の東遷を描いた作品もあるだろうから、さらに綿密な調査が必要であるが、張籍のこの詩は永嘉の乱を中心テーマとした珍しい作といえるかもしれない。

そうした中で、「永嘉行」の先行作品として注目されるのが、李白の「登金陵冶城西北謝安墩」(王琦注本卷二二)である。前半部分を挙げよう。

晋室昔横潰 晋室 昔 横潰し
永嘉遂南奔 永嘉 遂に南奔す
沙塵何茫茫 沙塵 何ぞ茫茫たる

竜虎門朝昏 竜虎 朝昏に門う
胡馬風漢草 胡馬 漢草に風し
天驕蹙中原 天驕 中原に蹙る
哲匠感類運 哲匠 類運に感じ
雲鵬忽飛翻 雲鵬 忽ち飛翻す
組練照楚國 組練 楚國を照らし
旌旗連海門 旌旗 海門に連なる
西秦百万衆 西秦 百万の衆
戈甲如雲屯 戈甲 雲の如く屯す
投鞭可填江 鞭を投じて 江を填むべきも
一掃不足論 一掃して 論ずるに足らず
皇運有返正 皇運 返正有り
醜虜無遺魂 醜虜 遺魂無し
談笑遏橫流 談笑して 橫流を遏め
蒼生望斯存 蒼生 望み斯に存す

この詩は、詩題が示すように謝安の功績を称えた作で、省略した後半部分には謝安を称揚する詩句が連ねられている。その点で、張籍の「永嘉行」が永嘉の乱そのものを主題としているのとはやや異なっているが、ここに引いた前半部分には、永嘉の乱から淝水の戦いに及ぶまでの戦乱の状況が詳しく述べられており、先行する作品として注目される。

なお、李白には「永王東巡歌十一首」其二(同前卷八)に「三川北虜乱如麻、四海南奔似永嘉」(三川の北虜 乱れて麻の如く、四海 南奔すること 永嘉に似たり)と、永嘉の乱によって安史の乱を喩える例もある。

後の状況について見ると、樂府題「永嘉行」は、後世にもほとんど用いられていないようだが(管見の及ぶ限りでは、南宋の薛季宣・明の高啓と王世貞にそれぞれ一首が残されるのみ)、ただ晩唐の詩の中には、永嘉の乱や晋の東遷を詠じた作品がいくつか作られるようになってきているようなので、最後にそれらを挙げておこう。

胡曾「東晋」(『全唐詩』卷六四七)
石頭城下浪崔嵬 石頭城下 浪崔嵬たり
風起声疑出地雷 風起こりて 声は疑う 地を出づるの雷かと
何事苻堅太相小 何事ぞ 苻堅 太だ相い小とする
欲投鞭策過江来 鞭策を投じ 江を過ぎて来たらんと欲す

崔塗「東晉」二首 (『全唐詩』卷六七九)

(其一)

五陵豪俠笑為儒
將為儒生只讀書
看取不成投筆後
謝安功業復何如

五陵の豪俠 儒と為るを笑い
將おもえらく 儒生は只だ書を読むのみと
看取せよ 成らずして 筆を投ずるの後
謝安の功業 復た何如

(其二)

秦國金陵王氣全
一竜正道始東遷
興亡竟不関人事
虚倚長淮五百年

秦國 金陵 王氣全し
一竜 道を正して 始めて東遷す
興亡 竟に人事に關わらず
虚しく長淮に倚ること 五百年

詹琲「永嘉乱、衣冠南渡、流落南泉、作憶昔吟」 (『全唐詩』卷七六一)

憶昔永嘉際 憶う 昔 永嘉の際
中原板蕩年 中原 板蕩の年

衣冠墜塗炭 衣冠 塗炭に墜ち

輿輅染腥膻 輿輅 腥膻に染む

國勢多危厄 國勢 危厄多く

宗人苦播遷 宗人 播遷に苦しむ

南來頻灑淚 南來して 頻りに涙を灑ぎ

渴驥每思泉 渴驥 毎に泉を思ふ

李白の「永王東巡歌」其二(前出)が安史の乱を喩えていたように、晩唐になつて、永嘉の乱を主題とした作品が増えたように見受けられるのは、恐らく当時の社会状況と関わりがあるだろう。特に、五代十国の時に乱を避けて鳳山に隠居したという詹琲の作は、混乱した時世を永嘉の時期に重ね合わせて樂府に詠じた作と思われ、時代状況を色濃く反映していると思われる。これらと併せて考えれば、張籍のこの詩も、単に永嘉の乱の様子を詠ずるだけが目的だったわけではないだろう。諷諭の意図が込められているかどうかは別として、永嘉の乱を通して、中唐の時期の社会状況を描いた作であると思われる。

(橋)